

行基にかかる伝説

略・・・なんといっても、伝承・伝説の一番多いのは奈良時代の行基(668-749)にかかわるものです。

廿日市・五日市あたりだけでも、行基作という仏像は、

極楽寺千手観音像	宮内光代寺千手観音像
正行寺阿弥陀如来像	地御前観音堂十一面観音像
地御前毘沙門堂毘沙門天像	原浄楽寺珪大日如来像
原国実薬師十二神像	石内浄安寺薬師如来像
保井田正柴寺薬師如来像	中地田中寺大仏像

とありますが、行基の歩いたところは、正しくは畿内地域にかぎりますし、ましてや仏師ではありませんから、これらの伝承は行基が如何に偉大であったかのしるしにはなりますが、郷土の歴史をこれによって語ることは出来ません。

また、それぞれの伝承は、そこだけのものと思いきや、広く見ると、一定の型によっていることが多いのです。それらのことを、まず、極楽寺から考えてみます。

平安時代の9世紀に、空海・最澄によって密教がもたらされてからは、観音信仰が盛んとなりますが、それも変化観音(十一面観音千手観音など)を本尊とする寺院が多くなります。また、現世利益を中心とした観音信仰も10世紀頃から浄土信仰の性格が深まってきます。

華嚴教によると、観音の浄土は「補陀洛山」といい、中国の船山列島にも普陀山がありますが、極楽寺を「上不見山浄土王院」というというのはこれらのことをふまえてのことでしょうか。十世紀末には靈験ある観音寺院への参詣が盛んになります。そして、11・12世紀になると、新しい観音の靈場が世俗化した大寺院を離れて修行や布教に務める聖(僧)によって各地につくられるようになります。

極楽寺の本尊千手観音は像高206cmの坐像ですが、一木造で、平安後期の作と鑑定されますから、恐らく、以上の時代を背景にして、極楽寺は出来たのではないのでしょうか。

本尊に関しては、寺の諸控に、「行基菩薩於当山以杉靈木為御素木彫刻之安置是山上」とあります。

行基のことは別として、杉の靈木によって本尊を作ったとの伝説は、これまた各所に同じ伝承があるもので、例えば観音の靈場である清水寺でも見られます。極楽寺の場合、杉の靈木のあったというのは、極楽寺より北へ2.5kmの大杉という所で、そのため、現在まで地名も大杉となっています。また、極楽寺の明細書に、

「始ノ木ヲ以テ四十八躰ノ弥陀仏ヲ作玉フ、次ニ坐像八尺四十臂ノ本尊千手観音ヲ彫刻シ玉フナリ、亦次ニ薬師仏ノ像ヲ造リ玉フ也、ソノ余木ヲ以諸仏菩薩ノ形像ヲ作り玉フナリ」とありますから、この伝承のうえに、冒頭に列記した諸寺の諸仏がそれぞれ行基作という伝承を持つことになったのではないのでしょうか。

もちろん、行基作であるわけではなく、また、杉で作った仏像でもありません。これらの仏像は時代、作風共に異り、全体から見れば、それが真実でないことは明らかですが、個々の仏像は、あるいは本当かもしれないということで伝承されてきたのだと思われま



極楽寺本尊千手観音像の頭部
(涙流しの観音といわれる (県重文))